

東洋學報 第參拾卷第壹號

昭和十八年二月

論說

康熙帝と典禮問題(一)

矢澤利彦

緒言

- 一 康熙帝が關係する以前に於ける典禮問題
  - 二 康熙帝が典禮問題に關係するに至つた動機
  - 三 康熙帝の典禮觀(以上本號)
  - 四 康熙帝と多羅使節
  - 五 康熙帝と德理格
  - 六 康熙帝と嘉樂使節
  - 七 使節羅馬派遣問題
  - 八 給票問題
- 結語

康熙帝と典禮問題

## 緒言

支那天主教史上に典禮問題が占むる位置の重要さに就いては、敢へて贅言を要しないであらう。そして教會史或ひは傳敎史の上からは、既にこの問題の本質は充分に解明され盡したと言つて差支へない。併しこの問題はコルディエ (Cordier) 氏が「支那典禮問題は中國天主教史上の最も興味ある一部門である。この問題の解決の如何は、支那にカソリシスムが弘通するや否やを決し、又既に早くからこの國に西洋のイデーが浸潤するか否かは、かゝつて傳道の成功の如何に存するものと考へられて來たのであるから、支那典禮問題は宗教的と共に政治的重要性をも有したのである」と説けるが如く、世界近世史に於ける最大事件即ち「西力東漸」と密接な聯關を有するものであるから、なほこの立場からの綿密な檢討を必要とするのであるが、それは未だ必ずしも充分な程度には行はれて居ないやうである。しかも先年陳垣氏等の手によつて北京の故宮懋勤殿より十五通の漢文史料が発見され、それが「康熙與羅馬使節關係文書」として印行されてからは、康熙帝の典禮問題に對する態度、換言すれば東漸西力に對する東力の反撥と云ふ意味から、この問題を考察することが出来るやうになつた。この史料に關しては、發見者の陳垣氏(2)を始めとして、桑原(3)・玉井(4)諸先輩の研究があるが、そのいづれも紹介の域を多く出でないものである。私が自ら措らず「康熙帝と典禮問題」なる題目の下に小稿を卓する所以のものは「康熙與羅馬使節關係文書」の各々を形式的に、内容的に研究し、康熙帝と典禮問題との關係を論ずることによつて、西力東漸史上に於けるこの問題の意義を討究し、以ていささか從來の研究の缺を補はんとするにある。もとより淺薄極まる私の識見ではあり、且つ本書の草稿は既に

六年前に作られたものである關係などから、誤謬なきを保し難いのであるが、現在西力東漸の問題、或ひは康熙帝の統治の問題等が一般人士のかなり深い關心をかつて居る時に、徒に筐底に死藏するのいかゞかと思はれるから、敢へてこゝに公表して同學の批判に俟ち度いと思ふ。願はくは示教を吝まるゝ勿れ。

註

- 1 Corrier, Histoire générale de la Chine, T. III, p. 318.
- 2 「康熙與羅馬使節關係文書」影印本敘錄。
- 3 桑原隲藏「新に發見されたカソリック教の宗論關係の二史料」〔史林〕十一の三)
- 4 玉井是博「典禮問題に關する漢文の二資料」〔市村博士古稀記念東洋史論叢〕及「支那社會經濟史研究」

## 一 康熙帝が關係する以前に 於ける典禮問題

支那典禮問題と云ふ漠然たる名稱を以て呼ばれて居るものは、詳しくは次のやうな諸問題を包含して居る。

- (一) 基督教の至高者を意味する諸國民の言葉、Dems, God, Dieu, Dio 等に相當するゝかなる支那語を使用すべきか。上帝とか天とか云ふ語は、果してこれらの言葉と同意義を示すものか。——用語上の問題。
- (二) 孔子崇拜・祖先崇拜・皇帝崇拜等のために行はれる儀式に、支那人にして既に天主教に歸依した者が、他の支那人と共に參加することを許可してよいか。——支那典禮に關する問題。

(三) 婦人に對する聖禮の授與は除外してよいか。支那人天主教徒に十字像を隠して見せないのは果して寛恕され得るか。——カソリックの典禮を支那人に適用する場合の問題。

右に明かなるが如く、これは必ずしも支那典禮にのみ關係したものでなく、支那の習俗とカソリックの教慣とをどの程度まで妥協せしめ得るかと云ふ問題であつて、一名 *Akkommodationsfrage* と稱せられるのはこの點に起因するのである。併し問題の中心が常に支那典禮の上であり、特に康熙帝が介入してより以後は、(三)の問題は完全に論外に置かれたのを見れば、この問題を名附けて支那典禮問題としても何等不都合はないのである。

典禮問題は實にその發端を耶蘇會士の來支に有するのである。即ち十六世紀末マッテオ・リッチ (Matteo Ricci 利瑪竇) ミケレ・ルッヂエーロ (Michele Ruggiero 羅明堅) 以下の耶蘇會士が踵を接して來國するに及び、彼等の宗教的見解の相違は終に典禮に對する耶蘇會の意見を二分したのである。一はリッチによつて代表せられるもので、支那典禮に對する寛容的な立場を強調し、二はニコロ・ロンゴバルディ (Nicolo Longobardi 龍華民) が首唱するもので、支那の諸典儀を迷信的なものと見て、天主教徒がこれに參加することを拒否すると云ふ意見であつた。

典禮に關するリッチの意見は、康熙帝が「利瑪竇的規矩」と稱して推賞して居るものであるだけに、頗る寛大な、妥協的色彩の濃いものであつて、先づ天主なる語を自ら發見して至高者を意味させると共に、天及び上帝等の言葉をもこれに相當するものと認めたのである。孔子崇拜はそれを行ふことによつて何等かの幸福を求めようと云ふものではなく、彼の著書によつて人が受ける恩恵に對して感謝の意を表するものである

と見、同様祖先崇拜も子孫が自分を生れしめたことに對する感謝の意を祖先にひかつて表すものであると考へたのである。又皇帝や大官に對して行はれる尊敬の儀式も、その場合には動物の肉を捧げたりすることはないのであるから、これを迷信的であると斷ずる必要はないとした。

これらのリッチの考へは後に説く康熙帝の典禮觀と近いものであるが、かく妥協的色彩に富んで居るのは、主として彼が新傳道地の開拓者であつたことに起因するものと思はれる。即ち彼は頑固なる神學者としてよりも、忠實なる傳道者として事に臨んだから、支那の諸典儀を *Quia* なものとして見てこれを天主教徒に許可し、以て傳教の成功を確保せんと圖つたのである。そこに嚴格なる神學者的立場を守つて布教に當つた宣教師とは一致し難い一點が存したことは見逃せない。こゝに典禮問題發生の餘地があり、かくて彼が歿するに及んで問題は先づ耶蘇會内部から發生することとなるのである。

このリッチの典禮に對する解釋に反對した者が、彼が生前自己の後繼者として支那耶蘇會會長に選んで置いたロンゴバルディであることはいさゝか皮肉である。彼は最初より天とか上帝とか云ふ言葉が眞に基督教の至高者を意味するものと同内容を持つと云ふことに大なる疑惑を懷いて居たが、他の耶蘇會士がそれとをり上げないので暫くこれを胸底に藏して居たところ、彼がリッチに嗣いで會長となるや、日本在住の會士フランチェスコ・パシオ (Francisco Pasio 巴範濟) が思ひがけなくそれを指摘して研究をすゝめたのに刺戟されたから、根本的解決を志すに至り、遂にその結果天及び上帝の兩語を以て至高者を意味せしめることの誤りなるを斷じ、更に孔子崇拜・祖先崇拜等をも否認するに決したのである。ロンゴバルディはかく斷ずるや、直ちにそれを在支全宣教師に布告したから、これを契機として典禮に關する論争が耶蘇會内部に活潑に

行はれることになつた。この事態を憂慮したロンゴバルディは、會士の意見を統一するために、一六二八年、江蘇省嘉定に宗教會議を開催し、支那の典禮を全體的に異端と斷じてしまつた。<sup>8)</sup>併しこの決議はなほ耶蘇會士全體を心服せしめるには足らなかつたから、ロンゴバルディは更に一六三五年再び嘉定に議したが、<sup>9)</sup>素志は終に徹底せず、問題は未解決のまま、彼等の間に殘された。併し有名なるアルフォンソ・ヴァニョーニ (Alphonso Vagnoni 王豊肅・高一志) やディダゴ・デ・パントーハ (Didaco de Pantoja 龐迪我) 等の熱心なる典禮支持者は勿論のこと、<sup>10)</sup>在支耶蘇會士は大部分は結局リッチの解釋に従つて居たものと考へられる。

即ち一六三一年以來、ドミニコ派フランチェスコ派の宣教師が陸續として來朝するに及び、彼等が從來耶蘇會の採り來つた布教方法を以て、基督教の教義を誤るものとして非難を加へ衝擊を與へたことは、蓋しこれを立證するものであらう。<sup>11)</sup>耶蘇會はこの衝擊に遭ふや、自派内部に於ける意見の相違を克服し、一致してこれら新來教團の攻撃の矢面に立つたのであつた。こゝに從來單に耶蘇會内の神學的な争ひであつた典禮問題は一轉して宗派間の政略的紛争にまで進展するに至つた。思ふに耶蘇會と他教團とは當時歐洲に於いて既に種々の原因から兩立し難い形勢にあつたところ、<sup>12)</sup>今度耶蘇會の支那傳道成功の報に嫉妬した他教團が新たに多數宣教師を派して、傳道の地盤を開拓せしめることになつたのであるから、兩派の葛藤は支那を舞臺として何らかの形を以て現はるべき運命にあつたのである。かくして典禮問題は從來とは全く變つた烈しい様相を以て展開されたのである。一方更にこの宗争の上に影響を與へ、これを猖獗ならしめたものは兩派の背後に存した二つの國民的勢力の角逐である。抑々マカオを中心とする葡萄牙人とフィリッピンを根據とする西班牙人とは、互にそれらの地より支那貿易の獨占を企圖したのであつたが、彼等は共にこの目的を容易なら

しめるために、支那に於ける傳道保護權の獲得を競つたのである。即ち葡萄牙王は一五三四年・一五七六年等の法皇勅令によつて支那に於ける傳道保護權、即ち *Padroado* を確保し得たと信じたのであつたが、なほこれには解釋の餘地を存したため、西班牙人は葡王の主張を無視して支那侵入を試み、自國の宣教師を派遣して目的の達成に努めたのである。かくして耶蘇會は先づ葡萄牙と聯合して支那傳道の獨占を企圖し、これに後れたドミニコ、フランチェスコ等の諸教團は葡萄牙の仇敵たる西班牙と組んで割込みを畫策することゝなつたのである。

かくの如き宗教的、國民的對立感情は、自然彼等の間に惹起された典禮問題の上に作用せざるを得なかつた。これらの感情によつて極度に興奮させられた宣教師達は、自己の自分を忘れて必要以上此の問題に關心を集中し、しかも徹底的な研究を支那典禮の上に行ふことなくして、徒らに蛙鳴蟬噪するの形勢を招致したのである。こゝに至つては、前期に於けるが如く、一教團の指導者の手を以てしては如何ともし難いものとなつたから、遂にその解決を法皇より得んとする運動が、兩派によつて競争的に行はれることゝなつた。かくして東亞の大國支那の禮俗は、俄かに歐洲の識者の注視の的となつたのである。

先づドミニコ派宣教師ファン・バウティスタ・モラレス (*Juan Bautista Morales*) は一六四三年羅馬に到り、典禮に關する十七ヶ條の疑問を布教聖省 (*Propaganda*) に提出し、インノセント十世より、翌々年九月十二日、これに對する回答勅令一典禮を否認するを得た。モラレスが歸支し、一六四九年この勅令を在支宣教師に通告するに及んで、耶蘇會はこれに對抗する必要上、一六五一年かの有名なるマルティノ・マルティニ (*Martino Martini* 衛匡國) を羅馬に派し、自派の見解を法皇に達せしめた。時の法皇アレキサンダー

七世は、一六五六年三月二十三日附の勅令によつて、典禮を頑強に寛容せんとする耶蘇會の立場を肯定した。かくの如く、典禮に關する全く矛盾せる二つの見解が共に法皇によつて認容されたため、論争は益々激化され、遂に收拾すべからざる状態に立至つたから、クレメント九世は一六六九年十一月十三日、勅令によつて、一六四五年と一六五六年の勅令とは互に齟齬するものではなく、兩者は共に事情と環境とに従つて兩立し得るものであるとなしたが、この曖昧なる判断は事態を解決に誘致するものではなくして、徒らに悪化せしむるに役立つたに過ぎなかつた。寛嚴兩派は互に自己の見解が事情に適切なるものであることを主張して相譲るところがなかつた。かくて歐洲の宗教界は全くこの紛争の中に捲込まれ、全歐の印刷機もこの宗論に活字を提供するに足らぬ如き形勢を現出した。耶蘇會ではル・コムト (Le Comte 李明) 等の支那通が典禮擁護の論著を發表して氣勢を上げれば、ドミニコ會、外方傳道會の諸師も斷じてこれに譲らず、その蘊蓄を傾けて餘すところがなかつた。

かくの如き狀勢を憂へた法皇廷では、外方傳道會の僧にして福建の司教たるシャルル・メーグロ (Charles Margrot 閩當) をして典禮に關する實際の報告を行はしめた。メーグロは福建の如く支那の中心を遠く離れ、實情の踏査には多くの不便のある地に在りながら、一六九三年有名なる教書を發した。彼はこれに於いてアレキサンダー七世の勅令が事情に即さないものである旨を力説し、その無效なる所以を強調した。これに對して耶蘇會も大いに反對意見を發表して應酬するところがあつたが、典禮否認者の運動は日を追うて熾んとなり、一六九七年には外方傳道會の代表者ニコラ・シャルモー (Nicolas Charriot) は聖廳に意見書を提出して解決を迫つたから、法皇インノセント十二世は遂にこれに動かされ、一六九九年四月十八日、樞機員か



らなる支那典禮に關する最初の調査會を開催したのである。

典禮問題全般の形勢がかくの如き状態にあつた時に、突如として支那の君主康熙帝より干渉の一石が投ぜられたのである。しかもその波紋は見る／＼擴り、忽ちの内にカソリック教會を暗雲の中に閉ぢこめる結果となつたのである。しからば康熙帝は何を契機として典禮問題に關與するに至つたのであらうか。それは次章に於いて詳説するであらう。

## 註

1 佛蘭西の學者は *la question des rites* と云ふ言葉を以て單に理論的な問題のみならず、一つの事件を意味させて居る。私の典禮問題と云ふ語も全くこの用語法に従つたものである。然るに獨逸の學者は理論的な典禮の問題を表はす時には、これを *die Ritenfrage* と呼び、典禮に關する事件を表はす際には、これを *der Ritenstreit* と呼んで區別して居る。尤も佛蘭西人にも *la question des rites* と云ふ言葉を使ふ人が居るが、これは稀例に屬する。かくの如き佛人と獨人との用語法の相違は、恐らく獨人の用語法が嚴密であること、*question* と云ふ語と *Frage* と云ふ語の相違とに根ざすものであらう。日本語で何々問題と云ふ時には單に一個の問題のみならず、事件を意味することがあるから、典禮問題と云ふ言葉を以て理論上の問題と同時に、典禮に關して起つた事件を指してもよいと思ふ。尙ほ英人はこれを *Rites Controversy* と言ひ、日本人の中には儀禮問題と譯する人も居ることを附言して置く。

2 この分類法は大體ラトゥレット (Latourette) 氏のそれに據つたものである。典禮問題が理論的にはいかなるものかを知るにはこの分類法が最もよいと考へる。参考のためにマース (Maas) 氏の分類を掲げて置き度い。

- (1) 死者に對する儀式 (Totenbeweinung)
- 族 (2) 祖先崇拜 (Ahnenverehrung)
- 義 (3) 孔子崇拜 (Konfuziuskult)
- (4) 救國神崇拜 (die Verehrung des Götzen Teaching hoang)

- 廣
- (5) 神の名前に關する事 (der Streit um den Gottesnamen)
- (6) 宣教師等の態度、著物、説教等 (das Auftreten der Missionare, ihre Kleidung, ihre Predigt und ähnliches)
- 兼
- (7) 教會の戒の遵守、非遵守 (die Beobachtung bzw. Nichtbeobachtung der Kirchengebote)
- (8) 一定の聖禮の儀典、非儀典 (die Art der Spendung bzw. Nichtspendung bestimmter Sakramente)
- (9) 十字架像の禮儀 (das Verbergen des Bildes des Gekreuzigten)
- (10) 高利な利子 (the hohen Zinsen)

尙ほマーン氏の分類は氏の名著 *Die Wiedereröffnung der Franziskanermision in China in der Neuzeit* 中に見えるものであつて、同氏はこれ等の問題に對して極めて精緻な研究を行つて居るから、典禮問題の理論的方面的の解明は總てそれに譲ることにして、本篇では特に詳説することは避けるが、念のために一二氣がついたことだけ述べて置く。マーン氏分類の(5)の問題は最も早く起つたもので、耶穌會士の間に行はれた論争は主としてこれに關するものであつた。(8)の問題は主として婦人に關するもので、支那人は宣教師が婦人に聖禮を與へるのを見て非常に嫉妬したから、耶穌會士はこの猜疑心を避けるために婦人に對する聖禮の授與をひかへて居たのである。これが他派の宣教師によつて糾弾され、終に問題化したのである。詳しくは拙稿「支那天主教と女性の問題」(歴史學研究、六の十一)参照。(9)の問題が起つた理由は、偶像の否認を説く師父等が自ら十字架を崇用することを支那人が笑つたから、耶穌會士はこれを隠して支那天主教徒には見せなかつたのである。それが後來宣教師に發見されて問題となつた譯である。用語上の問題は、天とか上帝とかに對してなされる崇拜が果して迷信的なるや否やと云ふことになつて、結局典禮問題となる譯である。

4 一五八三年、リッチはルツヂネーロと共に暫く留守にして居た駿慶府に歸つたところ、留守居の支那青年によつて彼等の祭壇が天主と云ふ文字で飾られて居るのを發見し、以後天主と云ふ文字を使用するやうになつたと云ふことである。ルツヂネーロの著書「天主實錄」はその翌年に出されたものである。Huonder, A.; *Der Chinese Ritenstreit*, S. 5.

5 「上代支那人は上帝と云ふ名の下に眞の至高者を知つて居た。何故ならば、彼等の著した古典を調べて見れば、人は上帝が名こそ異れ、天と地との主なる我等が神と同一のものであることを見出すであらうと云ふやうな見方をした最初の人は、實にマッテオリッチにさうした」*Santa-Maria, A.; Traité sur quelques points importants de la mission de la Chine*, p. 55.

6 Mosheim, *Authentic Memoirs of the Christian Church in China*, p. 71.

7 「上帝と云ふ支那語が私に始めて苦痛を與へたのは既に二十五年も前のことである。何故ならば、私がこの國に来て、我がコンパニーの習ひに従つて孔子教の四書を讀んだ時に、私は多くの註釋者が上帝と云ふ語に與へて居る觀念が、聖なる性質に反するものであることを認めたらからである。併し永年傳道にたゞまはつて居た師父達が、上帝は我々の神と同一であると語つたので、私は不安を一時捨て去つて、かくの如きマタストと註釋との間の相違は、マタストの意義を正確に探らず、又古代の教義から全く離反せる註釋者の過誤に出でたるものであると考へ、この難問に力を注ぐことなく過したのである。」(Longobardi, N.; *Traité sur quelques points de la religion des Chinois* p. 1.)<sup>9</sup>尙有 Longobardi のこの書は一六七六年ナヤマンチ Navarrete (西班牙ドミニコ會士) により西班牙語で出版され、一七〇一年佛譯された。思ふに耶蘇會の敵手はこれを利用して相手を歴倒せんと計つたものであらう。

8 この宗會は十一人の耶蘇會士と數人の支那人によつて行はれ、一月間かゝつたと云ふことである。Bjerrmann, B. M.; *Die Anfänge der neueren Dominikanermission in China*, S. 173-4.

9 Morant, G. S.; *L'épopée des jésuites français en Chine*, p. 55.

10 Maas, O.; *Die Wiedereröffnung der Franziskanermission in China*, S. 59-60.

11 *Catholic Encyclopedia*, Vol. XIII, p. 88 by Brucker.

12 抑々フランチェスコ教團、アウグスチヌス教團、及びドミニコ教團は十五世紀末まではカソリック教會の大なる部分を占め、その主要なる目的は傳道であつた。フランチェスコ教團が元朝に於いて行つた布教事業は史上に於いて極めて著名である。然るに十六世紀に至つて新たに傳道第一主義の耶蘇會が生れた。この教團は他に見られない新鮮味を有して居たから、當時プロテスタント運動に對抗して起つたカソリック教會改革運動によつて鼓舞された有爲な青年の大部分を引寄せることとなり、その結果は他教團、殊に羅馬及び歐洲のインギジションを手中に握つて居た西班牙系ドミニコ派僧侶の嫉妬心を異常に刺戟し、兩派は烈しい對立状態に入つた。兩者は當時教會内部に對立して居た二つの傾向、即ち科學・教育・自由等を重んずる立場と、讀書を禁じ、羆獸を強ひ、服従を旨とする主義とを代表して居たから、到底一致協同を行ふことは不可能であつた。かくして起つたものがオウキシリウムの宗教會なるもので、兩者はこれを機會に益々烈しい争闘状態に入つたのであつた。しかもこの宗教會の黑白が未だ定まらぬ時に、支那に於ける耶蘇會傳道成功の報が歐洲に到着したのであるから、唯まへ耶蘇會に對して反感を有して居た他派教團の嫉妬心をそ

そらずにはおかなかつた譯である。

- 13 葡萄牙と西班牙とが互に傳道保護の權を争ふやうになつたのは實にコロムブスのアメリカ發見より始る。西班牙女王イサベラの支撥によつて西印度諸島を發見したコロムブスは、これらの地方がジバング島及び支那の海岸であらうと主張した。この事は當時既に法皇より印度人の征服を委任されて居た葡萄牙ジョアン三世をして驚愕せしむるに充分であつた。何故ならば、彼はコロムブスが極東だと言つて居る地方は實は印度に違ひあるまいと考へたからだ。そこで彼はアルメイダなる者をしてコロムブスの發見せる航路を尋ねさすことにした。併し、イサベラの夫なるフェルディナンドはこの地方が印度ではないと云ふ意見であつたので、一四九三年五月四日、法皇よりコロムブスが發見し、且つ發見しつゝある地方は他國の領土でない限り、西班牙のものたることを認むと云ふ勅令を得た。法皇は同一のことを葡萄牙のアフリカに於ける領地に對しても認めた。しかも兩國國民はその新領土に航海を行ひ、經略に従事し、天主教傳道に盡力すること等の權利を與へられたのである。翌年六月七日、トルデシリャス會議なるものによつて更に東經百三十六度の子午線を以て兩國領土の境界線となすことが定められた。併しその後印度航路の發見、南米周回航路の發見等があつたため、以前の定められた境界線は全く無能なものであることが判明し、爾後も屢々境界線の設定が法皇の手によつて試みられた。支那が葡萄牙の傳道保護權下に屬するものと考へられるに至つたのは、一五三四年、パウル三世によつてゴア僧正管區が設置されてからのことである。一五七六年、グレゴリー十三世は葡萄牙王の願ひを容れ、支那・日本及びその近隣の島島を合せて獨立させ、その廣大な區域を新設のマカオ僧正管區の版圖とした。かくして葡萄牙王は支那に於ける傳道保護權を獲保したのである。これが葡人の主張してやまなかつた *Padroado* である。かくして支那に於いて傳道を行はうと希望する宣教師は、葡萄牙側の解釋に従へば必ずリスボンを経由し、葡萄牙船によつて渡航せねばならぬものとされるに至つた。Jann, A.; Die katholischen Missionen in Indien, China und Japan. Ihre Organisation und das portugiesische Patronat vom 15. bis 18. Jahrhundert.
- 14 Biernann; *ibid.* S. 20.
- 15 Jann; *ibid.* S. 55-57.
- 16 Latourrette, K. S.; *A History of Christian Missions in China*, p. 84.
- 17 耶穌會士と葡萄牙人との關係は最初から必ずしも圓滑に行つた譯ではない。フランチェスコ・シヤウエリオ (Francesco Xavierio)

- 〇 如きは葡人が、*傳道を妨害せられたる*の目的に合ひ居る (Cros, J.-M.; *Saint François Xavier. Sa vie et ses lettres*, T. II, pp. 357-8)。併し彼らこそ元々葡國王ジョアン三世によつて極東に派遣された者であるし、耶穌會の眼目とする海外傳道の大本は葡國王の企圖する海外貿易獨占の希望と平行し、更に耶穌會が支那に試みた一國一教獨布教主義は、葡萄牙の固守せる支那傳道保護權の獨占と全く合致した上に、當時の耶穌會のメンナーは、リョチ・ロンゴバルディ・アレニ (Areni) 等の伊太利人、トリヤー (Trigault) の如き佛蘭西人、アダム・シャル (Adam Shail) の如き獨逸人を除いては概は葡萄牙人であつた。
- 18 Catholic Encyclopedia, Vol. III, p. 671.
- 19 Navarrete, Fernandez; *An Account of the Empire of China, Historical, Political, Moral and Religious*, pp. 572-7.
- 20 *Compendium historiae ecclesiasticae ad usum Seminariorum Pekinensis*, p. 350.
- 21 Cordier, Henri; *Histoire générale de la Chine*, T. III, p. 325.
- 22 Thomas, A.; *Histoire de la mission de Pékin*, pp. 166-70. 此の教書の佛文譯が掲載されて居る。

## 二 康熙帝が典禮問題に關係するに至つた動機

康熙帝が典禮問題に關係するに至つた動機を示すものは、「正教奉褒」下卷所載の左の漢文である。

康熙三十九年十月二十日、治理曆法遠臣閔明我・徐日昇・安多・張誠等、謹奏爲恭請睿鑒、以求訓誨事、竊遠臣看待、西洋學者、聞中有拜孔子及祭天地祖先之禮、必有其故、願聞其詳等語、臣等管見以爲、禮孔子、敬其爲人師範、並非祈福聰明爵祿而禮也、祭祀祖先、出於愛親之義、依儒禮亦無求祐之說、惟盡孝思之念而已、雖設立祖先之牌、非謂祖先之魂在木牌位之上、不過孺子孫報本追遠如在意耳、至於郊天之禮典、非祭蒼蒼有形之天、乃祭天地萬物根源主宰、即孔子所云郊社之禮、所以事上帝也、有時不

稱天者、猶主上不曰主上而曰陛下曰朝廷之類、雖名稱不同、其實一也、前蒙皇上所賜匾額、御書敬天之字、正是此意、遠臣等鄙見以此答之、但緣關係中國風俗、不敢私寄、恭請睿鑒訓誨、遠臣不勝惶悚待命之至、本日奉御批、這所寫甚好、有合大道、敬天及事君親敬師長者、係天下通義、這就是無可改處、欽此。

この史料は康熙三十九年十月二十日、耶蘇會士グリナルディ(閔明我)、ペレイラ(徐日昇)、トーマ(安多)、ヂェルビヨン(張誠)等が、西洋の學者に支那典禮の本義を説明する必要上、先づ自派の典禮觀を述べて康熙帝の訓誨を求めたところ、帝はこれら諸師の見解が支那道德の本質に合致するものであると述べたと云ふことを傳へたものである。然らば耶蘇會士は一體何故かゝる行動に出でたのであらうか。

前章に於いて説明せるが如く、一六九三年、福建の司教メーグロが支那典禮否認の教書を發布して以來、歐洲に於いては漸次この立場が勢力を得、その代表者たる外方傳道會(Missions Etrangères)は法皇廷に對して自己の勢力の扶植に努めたから、法皇を初めとして聖廳の有力者達は次第にこれに動かされ、その結果遂に一六九九年、インノセント十二世による支那典禮調査會の開催となつたのであるが、この歐洲の狀勢は必然的に在支耶蘇會士の注意を喚起せしめるに至つたのである。即ち彼等の所屬する耶蘇會はマッテオリッチ以來支那に傳教すること最も古く、中國の事情には他の何れよりもよく通達して居るにも拘はらず、その支那典禮に對する意見が輕んぜられて、事情に疎い他教團の見解殊に福建の如く支那の中心を離れて人智蒙昧、習俗が甚しく中央と異り、從つて迷信的信仰が頗る蔓延して居る地方の典禮を研究したメーグロ等の見解が、今將に法皇廳を動かさうとして居るのを知つて、大いに切齒扼腕を禁じ得なかつたから、こゝに

何らかの強引な手段を採つて、全般の形勢を自派に有利に轉換させる必要に迫られたのであつた。彼等は勿論この際、尋常の手段を以てしては到底目的を貫徹し得ないことを知つて居たから、更に大きな勢力に依存して調査會に於ける敵手を壓倒する必要があるがあつた。このために彼等の目を着けるところとなつた者が、實に當時世界第一の大國中華の君主たる康熙帝であつたのである。かくして彼等は康熙帝より支那典禮に對する自派の見解の批准を得、この獨裁君主の絶大なる權力を背景に持つことによつて、押され氣味の典禮調査會の空氣を一變せんと企圖したのであつた。前掲の漢文は蓋しこの間の事情を示すものに他ならないのである。該文に見えるが如く、自己の支那典禮に對する見解が、思ひ通り康熙帝の批准するところとなつたので、耶蘇會士等は直ちに彼等の上奏文と皇帝との寫しを羅馬に傳達し、目的の達成に努めた。然もその際左の如き言葉を副へて自派の行動を辯護して居る。

余等北京在任の耶蘇會士は、この帝國に於ける孔子崇拜並びに祖先崇拜に關する典禮が、果して純粹に道義的 (Divine) なものなるや否やを決せんが爲めには、清國皇帝に對してその眞實正當なる意義に關し、正確なる判斷を與へられんやう請願を行ふの最も適當なるを思へり。

正確なる判斷と言へるは、即ちかゝる事柄に關する支那國民の行動並びに思考を決するは、一にかゝつてこの國の聖俗なべての統治者たる皇帝の權に存すればなり。彼が權威は絶對にして、そこに何等の不平等の聲なし。全國民は皇帝の典儀に就きての意見、並びに古典に對する解釋より一步も違ふを得ず。彼が決定の權威は、彼が全國民に示せる明識によりて、愈々高き讚辭めて輝かん。

右に明かなるが如く、在京耶蘇會士は康熙帝が當時の支那人中で最も學識ある者の一人であり、その權威

はよく全國民をして各方面の政策を遵奉せしめるに足ることを早くも觀破し、従つて康熙帝によつて公認された典禮に對する見解は、全支那人の支持を失はないであらうと云ふことをも豫見して居たから、この間の事情を法皇に知らせたならば、必ずや聖廟の意見をも動かすことが出来るであらうと信じたのであつた。勿論彼等はその上奏文中に「但緣關係中國風俗、不敢私寄、恭請鑒訓誨」とあり、又前掲の法皇に呈した書簡の中に「清國皇帝に對してその眞實正當なる意義に關し、正確なる判斷を與へられるやう請願を行ふの最も適當なるを思へり」とある如く、支那の典禮に對しては自分達西洋人が徒らに説を設けるよりも、支那一流の學者であり、然も專制君主たる康熙帝の意見を知ることが最も必要且つ正當であると信じ、法皇も必ずやかかる立場を承認するであらうと考へたのである。耶蘇會士等が自分達の見解に對する康熙帝の批准を得、これを羅馬に傳達するが如き態度を採るに至つた理由は、先づかくの如く解釋すべきであらう。この耶蘇會士の行動に對してコルディエー (Cordier) 氏は次の如く言つて居る。

なる程、耶蘇會士は敵手のために撃ちつけられはしたけれども、併しひるむことなく闘つた。彼等は賢明ではあつても實際的ではない神學者に對しては、孔子教の儒者達の證據を以つて當つた。拉典語の論辯には支那語のテクストを以つて對した。法皇の意見には支那皇帝の助言を以つて答へた。この支那皇帝は今日も尚ほ使用されて居る有名なる字典の編者で、當時支那第一流の學者であつた。彼はその征服と學問知識とに與へた保護とによつて Louis 十四世に比較することが出来る。これぞ有名なる康熙帝である。

かくて耶蘇會士は康熙帝の威力を借りることによつて自派の立場を擁護し、典禮調査會に於ける敵手を壓



倒せんと圖つた。併し不幸にして法皇廳は支那典禮が道義的なものなるや否やを検するに當つて、支那皇帝の意見を求むるの必要を認めず、康熙帝の威力も又羅馬を壓するには足らなかつたから、耶蘇會士が絶對に效果ありと信じて行つたこの對抗手段も、遂に有耶無耶の中に葬り去られることとなり、一七〇四年十一月二十日、調査會は支那典禮を以て迷信的なものと議決し、法皇は直ちにこれを准許するところの勅令を發布した。

耶蘇會士よりの督促を契機として、康熙帝が典禮問題に對して投げた最初の一石は、かくの如くして終に無効に終つた。併しその波紋は決して消えたものではなかつた。何故ならば、この一舉によつて皇帝は典禮問題に對して異常なる關心を懷くこととなり、今後の事件の進行に重大なる影響を與へるに至つたからである。これに就きてトーマス (Thomas) 氏は、

たとへ北京の耶蘇會士が皇帝に求めたものは、決裁ではなくして、立證であつたとしても、既にそれだけで彼等の行動が不謹慎であつたと云ふ事實は動かし難い。兎に角宣教師は皇帝の權威を頼つてこれを委ねたのであるから、その結果皇帝が自分は仲裁者として選ばれたのであると考へるのは當然であつたらう。故に皇帝が若し聖廳の決裁が自己の見解とは異なるものであると云ふことを知つた場合、彼が如何なる態度に出でるか云ふことは豫測するに難くはないではないか。

と述へ、又ユック (Huc) 氏は、

宣教師達はこの論争の決裁を聖ピエトロの後繼者にしてイエス・クリストの代理者たる法皇に求めずして支那皇帝に望んだのである。これだけでも彼等の採つた措置が頗る危険性に富んだもので、大なる騒

動を惹起せしめずにはあかない程のものであつたことには誰しも氣付くであらう。

と記し、以後典禮問題が紛糾を極めるに至つた大きな原因を耶蘇會士が世俗の君主にかゝる宗教上の問題に容喙する機会を與へたことに置くのであるが、兩氏の説はいさゝか早斷に過ぐる傾きはあるにしても、「燕京開教略」の著者が「聖教不泰、又從此始矣」と言つて居るのなどと共に、大略正鶴を得た見解となすべきである。

註

- 1 この漢文は第五章に於いて詳述するマッテオ・リパ (Matteo Ripa 馬國賢) が、支那帝在中に得た典禮問題關係資料を集録したものである。Documenti e Titoli sul Privato Fondatore dell' Annale R. Istituto Matteo Ripa の五九六—五九七頁にも載せられて居る。これを「正教奉獲」のものと比較すると二・三文字の相違がある。恐らく「京報」あたりを西洋人が寫したものであらうが、丁数の前後を間違へて居るところから見ると、之として漢文の讀める人の手になつたものらしくはない。
- 2 Memorie Storiche della Legation e Morte dell' Eminentiss Monsignor Cardinal de Tonnon 第三卷「十一—十五頁にこの漢文の伊太利譯あり。尙ほ康熙三十九年十月二十日は西紀一七〇〇年十一月三十日である。
- 3 Huc; Christianity in China, Tartary & Thibet, Vol. III, pp. 244-5.
- 4 Cordier, A.; Histoire générale de la Chine, T. III, p. 327.
- 5 Thomas, A.; Histoire de la mission Pékin, T. I, p. 175.
- 6 Huc; *ibid.*, Vol. III, pp. 245-6.
- 7 Alphonse Favier (英國總領)。「燕京開教略」は Favier 著 S. 著 Pékin, histoire et description 中の天主教に關する部分のみを引抜いて漢譯したものである。

### 三 康熙帝の典禮觀

康熙帝の典禮に對する意見は、これを分つて祖先の祭祀に關するもの、孔子崇拜に關するもの、祭天に關するもの、皇帝崇拜に關するもの、四種とすることが出来る。

祖先の祭祀に對する見解——支那人が祖先の名を銘した牌位を祭ることは、その死んだ父母に對する追慕の念から行ふのであつて、牌上に祖先の靈があると信じて行ふ譯ではない（中國供牌一事、並無別意、不過是想念其父母、寫其名于牌上、以不忘耳、原無寫靈魂在其牌上之理）。それは例へば西洋人が兩親の畫像を飾つて、その記憶を保たうとするのと、根柢に於いては何等變るところがないのだが、畫像には屢々巧拙があつて眞を傳ふるに足らない場合が生じ、さうなると却つて故人を冒瀆することになるから、寧ろ名のみを寫して敬意を表するに如かないのである（即如爾們畫父母之像、以存不忘之意同也、然畫像猶恐畫工有工拙、不如寫其名則無錯）。更に我々が祖先の牌位を供へるのは、實に父母が自分達を養育してくれたことに對する全き感謝の念から出でたものであつて、かの無心なる鳥類の雛すら、その親が死ねば數日の間鳴き悲しんで已むところがない。これも蓋し親が自分達を育てくれたことに對する感謝を忘れない心の現はれである。況んや萬物の靈長たる人間は更に更に一層この念が強くなくてはならない筈である。しかも心の中に感謝の念が強ければ強い程、日常坐臥の間に自づとそれが外部に現はれるものである。供牌と云ふことは實にこの念から出發したものに外ならぬ。若し兩親に變があつても心を動かさない者があるとしたら、蓋しそれは畜生にも劣る輩だ（中國供神主、乃是人子思念父母養育、譬如幼稚物類、其母若殞、亦必呼號數日者、思其親也、

況人爲萬物之靈、自然誠動於中、形於外也、卽爾等修道之人、倘父母有變、亦自哀慟、倘置之不問、卽不如物類<sup>(3)</sup>。一方吾人が牌位に向つて叩頭し、墓前に於いて祭と稱する儀式を行ふのは、それによつて自分達の幸福を求めようとするのではなく、唯故人の記憶を呼び返さうとして行ふのであり、故人のあかげで自分達が生存出来ることに對する感謝の意を表せんとするのである。然もこの供牌と云ふことは孔子より起つたものではなく、國民本來のものである。これを稱して異端となすはもつての外だ（供牌位原不起自孔子、此皆後尊敬意、並無異端說<sup>(4)</sup>）。

孔子崇拜に對する見解——孔子崇拜の意味からなされる諸典儀は、孔子が「五常百行之大道」を樹立し、「君臣父子之大倫」を形成して、教へを萬世に垂れ、人々に上を敬し、故人を尊び、長老に酬ゆべき大道を示し知らしめた、その立派な學說に對する尊敬の念から行ふのであつて、孔子を神格視してこれに祈願し、何らかの幸福を得んとするのではない。どこの國にも聖人と云ふ者があつて、その行事に範となすべきものがあれば、これによつてその人を尊び敬することがあらう。孔子崇拜は全くこの意圖から出たものに過ぎない（聖人以五常百行之大道、君臣父子之大倫、垂教萬世、使人親上死長之大道、此至聖先師之所應尊應敬也、爾西洋亦有聖人、因其行事可法、所以敬重<sup>(5)</sup>）。

祭天に對する見解——我々が天を敬して典儀を行ふのは天が天主——萬物の創造者であるからではない。一體天主と云ふものは、いくら見ようと試みても見得るものではない。それではいさゝか物足りないから、天主が創造した多くのものの中で、一番高い處にあり、且つ最も大きいものである天を便宜上選んでこれを敬するのである。然もその際、眞に敬意を表するものは天主であると云ふ觀念を心中に確乎として懐くことを

忘れないのだ（至于敬天之字、亦不是以天卽爲天主、乃是舉目見天、不能見天主、天主所造之物甚多、其大而在上者莫如天、是以望天存想內、懷其敬耳）。それは譬へば上表謝恩の際、皇帝を呼ぶは陛下・階下等の文字を以つてするのと同じであり、又、人民が御座を過ぎる時自然に君を敬する心が沸くのと同様である。陛下なる文字が工匠の造るものである陸（きざはし）と云ふ文字から成るからと言つて、これを疎略に扱つてよい理由があらうか。だから敬天と云ふ際の天と云ふ言葉は、物質的な天そのものを意味するのではなくして、造物主そのものを指すのである。この意味に於ける天を物質的な天と混同するのは全くの誤解だ。故にメーグロの如く、天主てふ名のみに固執して、天なる文字の使用を拒否するのは、中國の大道を無視したものと云はねばならぬ（譬如上表謝恩、必稱陛下階下等語、又如過御座、無不趨踰起敬、總是敬君之心、隨處皆然、若以陛下爲階下座位、爲工匠所造、怠忽可乎、中國敬天、亦是此意、若依閩常之論、必當呼天主之名、方是爲敬、甚悖於中國敬天之意）。

皇帝崇拜に對する見解——天を呼んで上帝と云ふのは、朕のことを萬歳となし、或ひは又皇上と呼ぶのと同じである。開闢以來今日に至るまで、未だ七千六百年しか經つて居らないと云ふ理由で、朕のことを萬歳と呼ばないと云ふ譯にもいくまい（呼天爲上帝、卽如稱朕爲萬歳、稱朕爲皇上、稱呼雖異、敬君之心則一、如必以爲自開闢以至如今、止七千六百餘年、尙未至萬年、不呼朕爲萬歳可乎）。

以上が康熙帝の典禮觀の大略であるが、一見して明かなやうに、帝は支那の諸崇拜を以て嚴格な意味での宗教とは考へず、寧ろ西洋人の謂ふ Civil なもの、卽ち道義的乃至は倫理的なものとして居たのである。この見方は先に第一章に於いて略述したマッテオ・リッチ（利瑪竇）の典禮觀に近いのである。かくの如く類

似を來した所以は、帝が自己の典禮觀を定むるに當つてリッチによつて漢文で書かれた諸著作を研究し、それによつて居るが、帝が「利瑪竇の規矩」と稱して屢々その遵奉を宣教師に迫つて居ることは、蓋しこれを立證するものであらう。勿論中華の君主たる康熙帝が支那在來の諸典禮を以て道義的なものと見なした根本的原因は他に見出されるのであつて、いま左にその二三を掲げて置かう。

第一に儒教そのものが、他の眞に宗教と見なされるものに比して實踐道德的要素に富んで居ることである。

第二に康熙帝は西洋文化輸入のために一六九二年天主教を公許した。かく許可した以上、前掲の諸崇拝を宗教と認めて支那人全體に強制するならば、支那天主教徒は事實上二つの宗教を信ぜねばならぬこととなる。かくては天主教公許の價値が失はれるから、支那の諸崇拝を道義的なものと斷じて、妥協を圖る必要があつたのである。

第三に康熙帝は當時支那一流の學者であつたと言へ、滿洲から入つて中土を征服した外夷の朝廷の君主であつたから、支那在來のものに對しては、明朝の諸皇帝の如く深い愛着を有して居なかつたに違ひない。かくて支那の固有信仰を天主教に對比出來る宗教と認めることなしに、單に道義的なものと斷じて憚らなかつたのである。

第四に康熙帝個人の性向として、宗教の方面には全く興味がなかつた。彼が極端な現世主義者であつたことは著名な事實である。故に彼が支那の諸崇拝を以て實際に道義的なものと見て居たことも想像出來る。

康熙帝はかくの如き妥協的見解を以て典禮問題に臨んだのであつた。然らばその結果はどうであつたか。

(未完)

註

- 1 「康熙與羅馬使節關係文書」第六。
- 2 同右。
- 3 「康熙與羅馬使節關係文書」第十一。
- 4 *Lo stato presente del' a Chiesa Chinesa rapresento a Monsignor Vescovo di.....p. 49.*
- 5 「嘉樂來朝日記」。
- 6 「康熙與羅馬使節關係文書」第十一。
- 7 「康熙與羅馬使節關係文書」第六。
- 8 「康熙與羅馬使節關係文書」第十一。
- 9 「嘉樂來朝日記」。
- 10 Morant (S. S.; L'épopée des jésuites françaises en Chine, p. 111.
- 11 後藤末雄博士「康熙帝とルイ十四世」(『史學雜誌』四三〇三)